読売新聞 2021.6.23

十人十色 6

子どもたちの今

学び方認め 子に自信

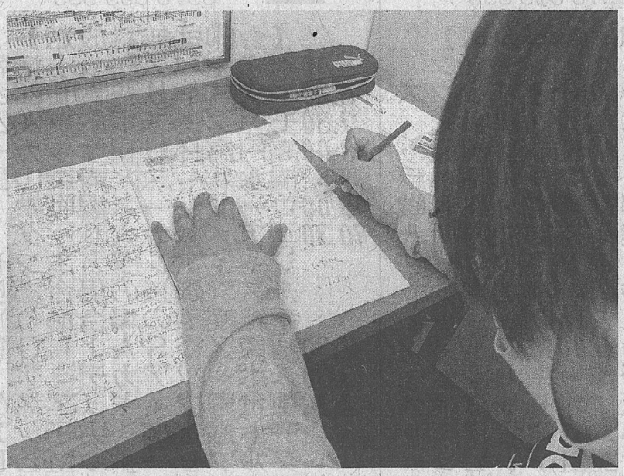
学習障害をめぐって

読み書きや計算が極端に苦手な子どもたちがいます。▽ひらがなや漢字が読めない▽読めるけれど書けない▽行を飛ばして読む▽形の似ている字を間違える▽時計が読めない▽九九を覚えられない――といった悩みのある場合、学習障害（限局性学習症）の可能性があります。

文部科学省の定義では、学習障害は全般的な知的発達に遅れはありませんが、読み書きや計算などに著しい困難がある、とされます。中枢神経系に何らかの機能障害があるとされ、同省の2012年調査では、公立小・中の通常学級にいる児童生徒の4・5％が該当すると推定されています。

多くの場合、苦手分野以外は問題がないため、判断が難しい障害と言えるでしょう。本格的な学習が始まるまで気づかず、本人の努力不足と思われることも少なくありません。努力しても気づいてもらえず、訴えることもできない状況が続けば、子どもは自信を失い、不登校や問題行動といった二次的な問題に発展することもあります。

ただ、注意深く観察すると、▽横読みは難しいが縦読みは得意▽教科書体は読みにくいがゴシック体は読みやすい▽言葉での説明は分からないけど、絵や図があれば理解できる▽書くのは苦手だけど、話すのは得意――など、一人ひとり苦手や得意なことに特徴があることが分かります。



算数に取り組む子ども

先日、小学生のお母さんから「子どもが『学校に行きたくない』と言う」と相談を受けました。別室で本人に聞くと「学校で授業を受けたいけど、字を書くのが苦手。黒板を一生懸命に写すけど、いつも先生に『もう少し丁寧に』と言われるのがつらい」と話してくれました。

そこで、学校に相談し、先生が重要だとして色づけした箇所だけ書き写したり、見にくい場合は前に来たりしても良いように配慮してもらいました。その後、その子は学校に楽しく通うようになりました。

一人ひとりの学び方の違いを知り、認めることが、子どもたちの自信につながっていくのではないでしょうか。

（発達支援塾アットスクール代表　鈴木正樹）